

■研究ノート

戦後の日本における華僑 華人¹⁾の研究史

門 永 美 保*

日本に居住する外国人には、華僑華人と呼ばれる中国大陸および台湾からの移民が多数を占めている。さらに近年、留学生として来日し、日本で職を得て定住する中国人が出現している。留学後、日本に定住する中国人は、これまでに考えられてきた経済的な要因による移動パターンや、華僑コミュニティを形成するといった従来 of 日本社会への適応パターンとは大きく異なるものと考えられる。本稿は、日本における華僑社会で起きている新しい現象を理解するための理論枠組みを設定するために、戦後から現代までの日本における華僑華人を対象とした研究をレビューすることを目的としている。

戦後から現代までの日本における華僑華人研究の変遷をたどることで、時代による研究対象の変化を次のように整理できた。戦後の日本における華僑華人研究は経済的な側面に着目したものであった。1960年代には社会学的な視点からの研究がいくつか進められたものの、1970年代に入っても経済的な視点からの研究が中心であった。1980年代、華僑社会の多様化が進んだことから、日本社会への適応パターンや文化摩擦などについても華僑研究の対象として取り上げられるようになった。最近では、日本の各地域の華僑華人社会を研究対象に、華僑のアイデンティティの変容や、エスニック・アイデンティティの維持、再構築といったこれまでとは異なる視点からの華僑研究が行われている。

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成 博士後期課程

キーワード：華僑華人、アイデンティティ、
エスニシティ

はじめに

本稿は、日本社会における華僑華人を対象とした戦後から現代までの研究動向を解説し、華僑研究の研究領域や変遷を通して、戦後から今日までの華僑華人の日本社会への適応パターンの変化を考察することを目的としている。

歴史的に振り返っても、日本に居住する外国人は、一つは在日と呼ばれる朝鮮半島からの移民と、もう一翼を担う華僑と呼ばれる中国大陆および台湾からの移民でその多数を占めている。この中で華僑を対象とした研究は戦前から相当量の蓄積がなされてきた。游仲勲が「日本における華僑研究、とりわけ戦後のそれは、主として華僑社会経済の研究に集中して」(游 1966: 90) いると述べているように、華僑研究の多くは戦後の研究を含め経済的側面に着目したものであった。

1980年代初め頃より、経済的側面からだけでなく、華僑の日本社会への適応パターンや文化摩擦などについても華僑研究の対象として取り上げられるようになり、さらに華僑のアイデンティティの変容や、エスニック・アイデンティティの維持、再構築といった別の視点からの華僑研究も見られるようになった。このような華僑研究の分野の広がりや、華僑社会において世代交代が進み、在日華僑社会の多様化が進んだことを反映していると考え

られる。

さらに近年、日本における華僑社会に新しい現象が加わるようになった。留学生として来日し、日本で職を得て定住する中国人の出現である。従来は留学後、母国に帰国して日本での留学経験を活かす留学生が多かったが、2000年頃から日本企業への就職を希望して留学する学生が増加してきた。留学後、日本に定住する中国人は、これまでに考えられてきた経済的な要因による移動パターンや、従来の日本社会への適応パターンとは大きく異なるものと考えられる。特に、1979年の一人っ子政策以降に出生した若者の行動や居住パターンは、それ以前と大きく変化したといえる。

これら新しい世代の変化を理解するための理論枠組みを設定するためにも、従来の華僑研究をレビューすることは有益と考える。

I. 日本における華僑華人研究史

I-1 経済学からのアプローチ

戦後の日本社会における華僑華人研究として第一にあげられるのは、内田直作の『日本華僑社会の研究』(内田 [1949] 1998) である。内田は本書において、江戸時代、明治以降、明治後半から戦後まもなくまでの時代に区分して、日本の華僑社会の基本的な構成諸団体の成立経過、構造、職能についての歴史的事実分析を試みている。さらにそれら分析から導き出された華僑社会の特性、華僑経済の構造を明らかにし、今後の華僑社会発展の法則を6つに分類している(内田 [1949] 1998)。

市川信愛が「今日、内田の研究実績をこえるものは寡聞にしていまだ接しない」（市川 1987：196）と述べているように、長年にわたり評価され、現在も日本における華僑研究のバイブル的な存在である。その後、須山卓、河辺利夫らが華僑華人について研究を発表するものの、世界の華僑社会、その中でも東南アジアを中心とした経済的な視点からの研究であり、日本の華僑社会を研究全体の中の一部に取り上げたただけであった（游 1966）。

地域別の華僑社会研究としては1954年に出版された鴻山俊雄の『神戸と在留中国人』が初期の研究としてあげられる。鴻山はこの書において、神戸開港以来の在留外国人、その中でも著者と交友関係の深かった神戸華僑を取り上げ、神戸華僑の生活風俗を伝え、神戸の発展史を神戸華僑社会からの視点で描いている（鴻山 1954）。その後1983年には『神戸大阪の華僑—華僑百年史』（鴻山 1983）で大阪を含む華僑の歴史に関する研究を発表している。この書では、前篇で神阪華僑史の時期的概況で主に貿易概況を取り上げ、後篇では前篇を補うための実地調査を行い、神戸大阪の華僑の一世紀にわたる経緯をまとめている（鴻山 1983）。

過放は鴻山の研究を含めた戦後から1970年代までの神戸華僑研究について「華僑史の分野においてある程度の成果を収め、のちの研究基盤を作りあげたものの、全体を俯瞰する総合的な研究はまだ不十分」（飯島編 1999：54）であったと指摘している。また、游が内田の研究を「宗教的、倫理的、友誼的、

社会救済的、政治的の全側面を包括」（游 1966：116）した日本華僑社会の研究の頂点であると位置づけていることから、日本国内全体においても内田の研究を超える総合的な華僑研究の成果はなかったと考えられる。

神戸大阪以外の地域別の日本の華僑社会を扱った研究としては、斯波義信の『函館華僑関係資料集』（斯波 1982）があげられる。斯波は幕末・明治・対象・昭和期にかけて、日本の北海道函館港に來住した華僑集団の、経済・社会・文化的活動記録を集成し、その全貌を俯瞰できるよう、時代順に配列した資料をまとめた（斯波 1982）。鴻山、斯波と同様に、日本の各地域における華僑の研究として、中村質、安井三吉、洲脇一郎、陳來幸、許淑真、寥赤陽、山岡由佳、山下清海、伊藤泉美らの研究もある。

この他、地方紙から日本の各地域における華僑の実態を記録したものも発刊されている。神奈川県華僑の生活実態を報告したものをまとめた『日本の華僑』（菅原 [1979] 1999）、神戸華僑の歴史から発刊当時までの華僑の活動をまとめた『素顔の華僑—逆境に耐える力』（神戸新聞社編 1987）である。地方紙から著作が発刊されたことは、日本各地における華僑社会の実態を広く世間一般の人々の目に供する機会を与えることとなった。

I-2 文化人類学、社会学からのアプローチ

戦後の日本における華僑研究は主として東南アジアの華僑社会経済の研究に集中していたものの、文部省科学研究費をうけて、横浜

四大学（横浜市立大学、横浜国立大学、神奈川県大学、関東学院大学）が横浜華僑を中心とした社会学的な調査・研究を行い、研究成果はあげていた。この研究成果として早瀬利雄が『華僑社会研究の諸問題(1)-(4)』（早瀬 1962, 1963a, 1963b, 1963c）をまとめている（游 1966）。しかしこの調査研究以外に、1970年代末までの社会学的領域における調査や研究論文、著作で評価を受けたものは残念ながら今回の研究では発見できなかった。

その一方で1980年代に入ると、華僑の世代交代や日本国籍取得、日本人との婚姻などによる華僑のアイデンティティの変容や、日本社会への同化などによる華僑社会の変容の文化的側面にも研究者の関心が向けられるようになった。次に、文化人類学的なアプローチによる研究を概観する。

戴國輝の『華僑—「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』では、台湾華僑である自分自身のアイデンティティの葛藤を語り、日本社会において華僑として果たせる役割を華僑に対して提言している（戴 1980）。1980年代以降、戴國輝と同様に、陳徳仁、王伯林、陳正雄ら華僑による研究が発表される。

山田信夫ら複数の研究者による共同研究は「外国居留・移民と文化摩擦」（山田編 1983：3）をテーマに、「異文化社会の中に身を置く個人もしくは集団をめぐってみられるに違いない『文化摩擦』現象」（山田編 1983：3）を日本在住の華僑に焦点をあて、研究が進められてきた。この研究報告書としてまとめられたものが『日本華僑と文化摩

擦』（山田編 1983）である。山田の『日本華僑と文化摩擦の研究—インタビューを通じて—』では、日本在住の華僑を対象にインタビュー調査を行っている。その分析によると、想像以上に華僑が日本の社会・文化に同化していると結論づけ、摩擦より同化現象を具体的に分析考察することが必要であると指摘している。また、日本華僑は少数の移民・居留集団であること、商人型移住と類型が可能であること、華僑の出身地が世界と比較すると多様であること、日本という特殊な条件のもとの移住であることから華僑として一般化できないと分析している。そこで山田は日本という特殊な条件を次のようにあげている。まず、居留国である日本と出身国である中国両国間の政治情勢²⁾や政治動乱³⁾が日本華僑に大きく影響を与えている点である。次に、清朝末期から革命をむかえる混迷状況の国から近代国家として急速に発展中である日本への移住、日本人の特性や教育程度をあげている。しかし、日本の宗教をはじめとした伝統文化には抵抗が少なかったであろうと想定している（山田編 1983）。また、山口政子は『在神華僑呉錦堂⁴⁾（1854-1926）について』の中で、「華僑を送り出した中国側の社会経済的背景から包括的に研究を行う為、その個々の華僑の社会史的・文化史的背景を知ることが必要」（山田編 1983：260）とし、個別のライフヒストリー研究の必要性を述べている。ライフヒストリー研究の成果として「経済活動とその背景、社会活動の指向性の分析等を通して、その社会的・文化的背景がより具体

的になり、同化・非同化、適応・不適応といった概念の具体像」（山田編 1983：281）を提示できたと述べている。なお、在神華僑呉錦堂の研究では、中村哲夫の『移情閣遺聞—孫文と呉錦堂—』（中村 1990）もあげられる。研究方法としてライフヒストリーを用いた他の研究としては、神戸開港以来、貿易、教育、宗教、文化、国際交流など多方面に涉って活躍した7人の神戸華僑のライフヒストリーをまとめた『神戸と華僑—この150年の歩み』（神戸華僑華人研究会編 2004）がある。

華僑の教育面に関心を向けた研究として、市川信愛の『華僑社会経済論序説』（市川 1987）があげられる。市川は「従来ともすれば華僑研究では経済・政治面にスポットが当てられ、文化面に対する関心がうすかった」（市川 1987：6）とこれまでの研究の領域が限られていたことを指摘し、同著では日本の僑校の特質に焦点をあて、教育面からの研究を行った。ここでは、日本の僑校と南洋華僑の子弟教育を比較し、日本における華僑の教育・文化面に見られる特色を明らかにしている。市川は「日本華僑の教育は東南アジアに比べ、民族教育の基盤は相対的に強固である」（市川 1987：193）とその違いに言及している。しかし、市川は「『落地生根』の時代を迎え、日本の僑校も新しい方向を模索する必然に直面している」（市川 1987：194）と述べていることから理解されるように、日本華僑が新たな課題を抱える段階に至ったことを指摘している（市川 1987）。

さらに、日本の僑校を通して華僑の実態を

取り上げた研究として、杜國輝の『多文化社会への華僑・華人の対応—日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析』（杜 1991）がある。杜は華僑華人社会の諸事の中心的役割を果たしているのが華僑学校と考え、僑校卒業生に対して意識調査・分析を実施した。その結果、僑校卒業生は日常の行動、思考、生活様式は日本的なものに同化しており、その顕著な行動として思考言語がほとんど日本語である点をあげている。その一方、非常に中国人意識が高く、中国人社会への強固な帰属意識を保有していた点を指摘している。しかし、杜は華僑が日本文化にひかれ、日本に定住・定着したと分析している。そして、僑校卒業生と日本人との結婚が今後は通常となり、華僑華人同士の結婚は減少し、今後の日本の華僑・華人コミュニティの主体を構成していくのは、華僑華人と日本人配偶者の子弟であると予測している。杜はこの子弟は良質な国際人役となる人材であり、その人材を育成する僑校の存在価値を主張している（杜 1991）。

アイデンティティの変容を扱った研究として、過の『在日華僑のアイデンティティの変容』（過 1999b）がある。過は分析枠組みとして在日華僑社会を、表層—華僑社会史、中層—結婚にみる社会構造の変化、深層—アイデンティティの変容の三層に分け、それぞれの層の世代別モデルを設定した。すなわち、表層は華僑社会の初期から現代までの歴史、中層は移住側（来日華僑）と受け入れ側（日本国）との関連性、深層は国家間の相互関係

とエスニック集団としての在日華僑社会のありかたであり、それぞれの層の成員である華僑華人のアイデンティティの変容と、相互作用をあてはめ、世代別に分析を行った。その結果、世代交代とともに、日本国籍取得や日本人との国際結婚が増加し、華人化⁵⁾が急速に進んでいるものの、華人化の進行が出自や民族文化を否定して日本文化を獲得することを意味していないことを明らかにした。この研究結果から過は、華僑華人が自民族文化と日本文化を「ミックス」して、自分の中に統合するダブル・アイデンティティあるいはトランスナショナル・アイデンティティを形成していると述べている。また、ダブル・アイデンティティあるいはトランスナショナル・アイデンティティを獲得することは、華僑文化が日本文化と共生して、別の移民文化を形成してきたことの証しであり、このような多元文化の価値観が、これからの日本社会の発展を促進するのに必要であると過は提案している(過 1999)。

次に、朱慧玲の『日本華僑華人社会の変遷—日中国交正常化以後を中心に』(朱 2003)を取りあげる。朱は1972年の日中国交正常化以降における日本の華僑華人社会の変遷を分析した。1972年以前に来日した中国人とその子孫である「老華僑」と、1972年以降に来日して定住した中国人である「新華僑」の研究を通して、政治的・文化的アイデンティティや華人化の過程を追跡し、現代日本の華僑華人社会の「全体」がどのように発展し、変遷したのかを捉えようとした。朱は華僑華人社

会と日本社会との社会的距離が縮小し、華僑華人社会の世代交代によって、華僑華人の日本への同化が進んだと指摘している。また、朱は調査結果から日本の華僑華人社会における新華僑の占める割合が高くなり、華僑の学歴が上昇し、平均年齢が低下したと分析している(朱 2003)。朱が「日本の華僑華人社会に急速な知識化・低年齢化をもたらした」(朱 2003:252)と結論づけている点について田嶋淳子は、「新華僑に老華僑分析であてはめた図式をそのまま採用した」(田嶋 2004:50)点には問題があると指摘していることから、結論をそのまま鵜呑みにすることはできないと思われる。

I-3 新しい視点からの研究

華僑のアイデンティティ変容の研究では、華僑の日本社会への同化が進行していることと、民族文化と日本文化が統合される傾向にあることが明らかになった。その結果、華僑と日本の地域社会との関連性や、華僑が民族文化をどのように維持し、再編しようとしているのかにも関心が向けられるようになり、華僑の祭祀などの宗教行動からの視点によって民族文化の維持、再編を分析する研究や、華僑コミュニティを含む日本の地域社会の観光産業振興をめぐる研究といった、従来とは異なる視点からの研究もなされるようになった。

華僑と日本の社会、地域社会との関係性を問う研究として『阪神大震災と華僑』(安井三吉編 1997)があげられる。大震災からの

復旧・復興に際して、華僑総会、神戸中華同文学校、中華会館、同協会、南京町商店街振興組合といった場において、重要な役割を果たした14名の華僑へのインタビューをもとにしている。神戸の華僑の人々の被害状況、震災後の対応などを記録し、今後に向けてどのような課題があるのかを考え、華僑社会の仕組みと非常事態における華僑社会の機能、日本の地域社会、近隣の住民さらには兵庫県や神戸市など行政との関係を報告書としてまとめている。この報告書は「大震災と華僑という問題にとどまらず、在日華僑社会の過去、現在そして将来を考えるうえでも、また国際都市のあるべき姿を模索している神戸にとっても貴重なもの」（安井編 1997：3）になると安井は位置づけている（安井編 1997）。

次に、大橋健一の『「神戸南京町」の再構築と観光』（大橋 2000）を取り上げる。大橋は「新たなチャイナタウン」が都市構造再編の過程において意識的に再構築された存在であり、観光が都市構造の再編に密接に関連していると考え、「神戸南京町」の再開発に伴う観光化の展開を事例にあげて、グローバルとローカルの下で文化再構築過程における観光の意味を探ろうと試みた。大橋は「チャイナタウンの再構築は、観光との関連において、再構築、再創造された『中国文化』の既成を促している」（大橋 2000：36）と指摘している。また、大橋は「観光は、地域社会が外部世界と連関し、外部世界に対して自らを提示する機会を提供する。この意味において、観光は、文化やエスニシティのもつダイ

ナミズムをめぐる議論の重要な切り口となる」（大橋 2000：39）と観光が中華街コミュニティの理解の新たな概念となると捉えている（大橋 2000）。

エスニシティの視点から華僑を論じている研究としては、王維の『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』（王 2001）があげられる。王はエスニシティ再編・再構築において祭祀と芸能が重要であると考え、日本の三大中華街である長崎、神戸、横浜の新伝統祭祀である春節の祭祀を事例にあげて、現地調査と文献研究に基づき、エスニシティの視点から日本華僑の文化・社会のダイナミズムを考察している。この研究によって王は、日本の各地域における華僑社会の構造を分析し、新しい伝統祭祀の創出・再編よってもたらされた華僑のエスニシティ再編の現象の全体像を論じている（王 2001）。

さらにエスニシティ再編の研究としては、張玉玲の『横浜華僑の文化復興運動とエスニック・バウンダリーの再定位—横浜関帝廟の再建および関帝誕の創出を通して—』（張 2004）がある。張は1980年代後半に中国文化のシンボルである関帝廟⁶⁾や関帝誕⁷⁾を横浜華僑が中華街コミュニティにおいて復興、創造する過程を事例にあげ、文化的シンボルがエスニック・バウンダリーの定位に果たす役割について考察している。また、伝統文化の復興と創造やエスニック・バウンダリーの定位に観光が果たす役割の評価についても検証している。張はこの研究によって、横浜華僑は、文化的シンボルの創造と提示を

通して、自ら中国人アイデンティティを定位するようになり、この文化的シンボルは横浜中華街に居住する多様な華僑を統括し、横浜華僑のエスニック・アイデンティティを主張する手段となっていることを実証し、観光が伝統文化の復興の役割を担っていることを明らかにしている（張 2004）。

また、『観光地「南京町」の形成と発展からみる日本人と華僑が試みた「共生』』（張 2007）では、長崎、神戸、横浜の三地域における中華街の変遷と観光地としての発展過程を振り返り、それぞれの地域における華僑と日本人による相互作用が華僑の意識形成への影響を論じている。日本で生まれ育った華僑は多元的な華僑意識を持っており、新たな出身地に基づいたローカル・アイデンティティを形成していることを明らかにした。張は華僑が「中国人という特質を保ちつつ、日本社会の一員として生きる」（張 2007：175）という積極的な人生観を持っていると指摘している（張 2007）。

おわりに

戦後からの日本における華僑華人研究を以上のように整理した。経済的な側面の研究から始まり、その後は華僑の日本社会への適応パターンや文化摩擦などを対象に華僑研究は進められ、華僑のアイデンティティの変容や、エスニック・アイデンティティの維持、再構築といった別の視点からの華僑研究が行われるようになった。最近の研究成果として、日本における華僑華人がダブル・アイデンティ

ティあるいはトランスナショナル・アイデンティティを獲得し、日本の各地域に基づいた華僑のローカル・アイデンティティを形成している点が明らかになったことがあげられる。

戦後の日本における華僑華人の研究をレビューすることで日本における華僑華人の特殊性が明らかになったことは、今後の研究課題である従来とは異なる人の移動の分析枠組みを探るという点において意義があったものとする。

〔注〕

1) 華僑華人

「華僑」とは外国に定住している中国国籍保持者、「華人」とは居住国の国籍を有する中国出自の者と、中華人民共和国政府は定義している。日本に在住する「華僑」であれば「在日華僑」、「華人」であれば「在日華人」と表現するが、本稿では日本社会における華僑華人を対象にしているため、「華僑華人」の表現は「在日」の意味を有する。また、中国国籍保持の有無で「華僑」と「華人」の定義があるものの、日本における華僑社会では、「華僑」と「華人」を厳密に区別しない傾向があり、民族アイデンティティの視点から「華僑」と表現することが多い。

2) 政治情勢

日清戦争から始まり、日中戦争、太平洋戦争で日本が敗戦するまで、両国間は戦争状態であった（山田編 1983）。

3) 政治動乱

1945年の日本から台湾の独立、1972年の日中国交正常化による日本と台湾の国交断絶は、台湾華僑の国籍問題をはじめ大陸出身の華僑とのイデオロギー対立から起きた華僑総会の分裂など、華僑社会全体に影響を及ぼした（山田

- 編 1983)。
- 4) 呉錦堂
浙江省寧波府出身。明治の初め頃から神戸で貿易商として活躍し、日本華僑社会の中心的存在となった人物(山田編 1983)。
- 5) 華人化
ここで過のいう「華人化」は、居住・職業・婚姻・娯楽・交際関係・団体活動などの文化上の日本化である(過 1999b)。
- 6) 関帝廟
関帝とは三国志でも有名な実在の人物である関羽を神格化した名前。関帝廟は関羽を祀る廟である(張 2004)。
- 7) 関帝誕
関帝の誕生日を祝う拝神儀式。関羽は西暦160年農曆(旧暦)6月24日に誕生したとされている(張 2004)。
- [参考文献]
- 市川信愛, 1987, 『華僑社会経済論序説』九州大学出版会。
- 内田直作, 1949, 『日本華僑社会の研究』同文館(再録: 1989, 大空社)。
- 王維, 2001, 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』風響社。
- 大橋健一, 2007, 「現代都市とローカル・エスニック・コミュニティの動態」佐久間孝正編著『移動するアジア—経済・開発・ジェンダー』, 明石書店。
- 過放, 1999a, 「神戸華僑・華人に関する研究動向」飯島 渉編『華僑・華人史研究の現在』汲古書院。
- , 1999b, 『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂。
- 神戸華僑華人研究会編, 2004, 『神戸と華僑—この150年の歩み』神戸新聞総合出版センター。
- 神戸新聞社編, 1987, 『素顔の華僑—逆境に耐える力』人文書院。
- 鴻山俊雄, 1954, 『神戸と在留中国人』東亜学社。
- 鴻山俊雄, 1983, 『神戸大阪の華僑—在日華僑百年史』神戸華僑研究所。
- 斯波義信, 1983, 「在日華僑と文化摩擦—函館の事例を中心に—」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』, 巖南堂書店。
- 朱慧玲, 2003, 『日本華僑華人社会の変遷—日中国交正常化以後を中心に』日本僑報社。
- 菅原幸助, 1979, 『日本の華僑』朝日文庫(再録: 1991, 『日本の華僑(改訂版)』)
- 戴國輝, 1980, 『華僑—「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版。
- 張玉玲, 2004, 「横浜華僑の文化復興運動とエスニック・バウンダリーの再定位—横浜関帝廟の再建および関帝誕の創出を通して—」『華僑華人研究』1: 115-139, 日本華僑華人学会。
- 杜國輝, 1991, 『多文化社会への華僑・華人の対応—日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析』トヨタ財団研究助成報告書, 横浜中華学院校務研究室。
- 早瀬利雄, 1962, 「華僑社会研究の諸問題(1)」『経済と貿易』80: 1-7, 横浜市立大学経済研究所。
- , 1963a, 「華僑社会研究の諸問題(2)」『経済と貿易』81: 1-8, 横浜市立大学経済研究所。
- , 1963b, 「華僑社会研究の諸問題(3)」『経済と貿易』82: 1-10, 横浜市立大学研究所。
- , 1963c, 「華僑社会研究の諸問題(4)」『経済と貿易』83: 1-13, 横浜市立大学研究所。
- 安井三吉編, 1996, 『阪神大震災と華僑』科学研究補助金特別研究共同調査報告書, 神戸商科大学・神戸大学。
- 山口政子, 1983, 「在神華僑呉錦堂(1854-1926)について」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』, 巖南堂書店。

- 山田信夫, 1983, 「日本華僑と文化摩擦」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』, 巖南堂書店.
- 游仲勳, 1966, 「日本における華僑研究」『アジア研究』13(2): 80-118, アジア政経学会.

〔参考ウェブ〕

- 大橋健一, 2000, 「『神戸南京町』の再構築と観光」『立教大学観光学部紀要』2: 36-40, (2012年10月8日取得, http://cinii.ac.jp/els/110000084982.pdf?id=ART0000428895&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1356844842&cp=).
- 斯波義信, 1982, 「函館華僑関係資料集」『大阪大学文学部紀要』22, 1-335. (2012年10月20日取得, http://cinii.ac.jp/els/110004668252.pdf?id=ART0007398574&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1362273146&cp=).
- 張玉玲, 2007, 「観光地『南京町』の形成と発展からみる日本人と華僑が試みた「共生」」『愛知淑徳大学論集』7: 163-176. (2012年5月18日取得, http://cinii.ac.jp/els/110006486626.pdf?id=ART0008512952&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1356845021&cp=).
- 田嶋淳子, 2004, 「『書評』『日本華僑華人社会の変遷—日中国交正常化以後を中心に—』」中国研究月報 58(4), 49-50. (2012年5月18日取得, http://cinii.ac.jp/els/110002958728.pdf?id=ART0003257216&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1357208530&cp=)